



006

過去を未来につなぐ 仕事人インタビュー

白竹木材株式会社 / 棚橋みさ子



019 再生前後の写真で見る 古民家再生

01.福井県『若狭の民家』

02.愛知県『煎壳喫茶 治郎兵衛』

053 特集

癒しの食事処

01.新潟県 / 櫻苑

02.栃木県 / テットグランデ

03.高知県 / 土佐水木

04.新潟県 / トラットリア・ノラ・クチーナ

05.香川県 / うどん本陣山田屋 本店

06.千葉県 / 灰屋

07.香川県 / 五風十雨

08.宮城県 / 倉人

09.新潟県 / 江口だんご 本店

10.京都府 / ken蔵





097 古材を使った 新築住宅

静岡県『由比の家』
神奈川県『当麻の家』

WORLD MOOK ワールドムック995

古民家スタイル
No. 19 Contents 02



116 写真集

生きている 茅葺き民家

142 古民家相談窓口

【連載コラム】

- 010 木工の美 写真と文=大竹静市郎
- 012 古民家を継承する模型の力 文=菅野清八
- 042 世界の古民家紀行 写真と文=長谷川和男
- 094 アカデミア通信 文=今井俊介
- 110 日本の精神を照らす木造建築の世界 文=徳本栄三



現地再生の 工事過程



明治12年(1879年)築の民家を暮らしやすい二世帯住宅に

長年大切に住み続けられてきた過程において、ときに応急的な補修がなされ、家族構成や生活スタイルの変化に伴い間取りとの不一致も出ていた。二世帯のご夫婦のため、大らかな民家の空間をいかして不安なく、かつ気持ちよく暮らせるよう、2010年6月より改修の相談を開始。2012年6月、工事に着手した。



01: 解体工事

今回の改修では、土葺の重い瓦屋根をすべて撤去し、新設。破風板や軒先垂木など雨がかりの材も交換している。



02: 内部解体

外壁、内部間仕切り壁、床組みなどをほぼすべて撤去していく。床下の土間は、よく乾燥したよい状態であった。



03: 屋根葺き替え

新しい野地板の上は空葺の瓦屋根として軽量化を図っている。越屋根にはガラス瓦を葺いて天窗とした。



04: 柱脚の更新

柱の傷んだ部分は除去し、新たな材を継いで一体化させている。欠けていた差し鴨居も追加した。



05: 小屋組みの洗い

長年にわたって積み重なった塵や汚れを洗い落として磨き上げ、豪壮な小屋組みを美しくよみがえらせている。



06: 土間、基礎設置

土間は防湿シートを敷き詰め、鉄筋を組んでいく。たいていの古い民家の弱点である基礎の補強を行う。



07: 土間、底盤の打設

コンクリートを打設する。鉄筋コンクリートの底盤は建物の脚元を固めるとともに、防湿、防蟻にも効果的に働く。



08: 1階の床組み

天井高さを確保するため、十分な床下とはれないが、通気層を確保して床組みの木材を組んでいく。



09: 屋根葺き替え

新しい瓦に葺き替えられた屋根。高窓から十分な光を採り入れるため、2階の開口を既存よりも大きくしている。



10: 外壁工事

外観の損なわれていた部分は、全体と調和するように外壁を整えている。それと併せて構造の補強も行っていく。



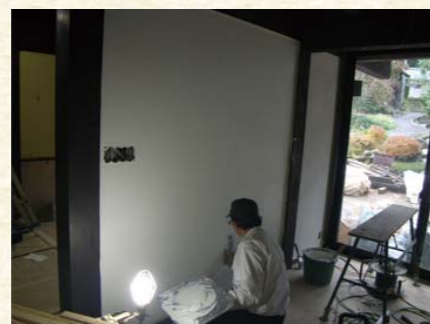
13: 外壁仕上げ工事

新たな木材と古材とが調和するよう塗装を施す。瓦まわりには鼠漆喰、壁には黒漆喰の左官工事が進められていく。



11: 内部造作工事

豪壮な小屋組みの下には、自立した軸組を設けて新たな内部空間をつくり出している。



14: 内部左官工事

居間、食堂など内部の生活主室は漆喰で明るく仕上げている。木材の古色と漆喰の白のコントラストが美しい。



16: 玄関壁左官工事

玄関は、壁に黒漆喰を塗った漆黒の空間。越屋根のガラス瓦から差し込む光に、小屋梁が浮かび上がる。



17: 外部土間仕上げ

玄関の土間は、細かな川石を埋め込んだ洗い出し仕上げ。豪壮な民家にしっとりとした和の情感を込めている。



12: 床板張り

寝室などの床には足触りの良い無垢の杉板を使用。常に人の肌に触れる部位である床材の選定には気を配っている。



15: 内部床工事

もともと玄関土間であった居間、食堂はタイル張りの床として、民家らしい土間の趣きを再現している。



18: 内部塗装仕上げ

内部に新たに張られた床板は、既存の木材に合わせて塗装を施す。落ち着いた空間に仕上がっている。



生まれ変わった
若狭の民家

完成

外壁を黒漆喰として落ち着いた洗練を重ねた外観。もとの玄関は、居間、食堂の大きな開口とし、明るく健康的な住まいとなった。設計と工事の約2年半を経て、2012年12月に引き渡し完了。民家は新たな生活の刻みは始めている。



4



2



3

「両親が元気なうちに再生できてよかったです。古民家のままなのに暮らしやすくなりました」

1



①玄関の上部には重厚な丸太の小屋根。間を間接照明で演出し、趣ある玄関として再生を図っている。既存玄関の上部に黒漆喰が見られたため、玄関の壁全面と外観も黒漆喰に。「黒っぽい燻しの屋根瓦ともよく合っていると思います」と木村さん。
 ②庭に咲く花と購入した花とを組み合わせ、センスよく生花を活ける奥様。右手側に一部が見えているのは、長い年月、屋根の上で住まいを守り続けてきた鶴の鬼瓦。床からの間接照明によって浮かび上がるようディスプレイしている。
 ③ゆとりあるキッチン。奥様と娘さん2人で余裕をもって使うことができる。「当初は、私たちの代で家を大きく直していいのかと荷が重かったですが、今となっては主人と私が定年になる前に再生ができてよかったと思っています」と奥様。「離れからの引越は徐々にするつもり。定年後にゆとり家づくりを楽しみたいです」。
 ④独立した娘さんが帰郷した際は、2階の和室を使っている。1人幅の木製スケルトン階段は、デザインのいいインテリアのように空間になじんでいる。奥様が選んだロールカーテンも和モダンなリビングダイニングと抜群の相性。庭の緑をバックに、美しい暮らしの風景が垣間見られる一枚だ。家具は飛騨高山の柏木工で統一している。

古民家再生02 愛知県 煎売喫茶 治郎兵衛

建築設計 | 棚橋みさ子 (白竹木材株式会社)
☎ 0566-4213266

Q&A 住まい手に聞く “現地再生” 一問一答

— 古民家を再生しようと思ったきっかけはなんですか？
母の兄が継いでいた家を譲り受けることになったため。その後で喫茶店を開こうと決めました。(奥様)

— もとの家での生活はどのような状態でしたか？
叔母が物の整理や掃除をしておりますは綺麗でした。

— 再生にあたってどのような要望を伝えましたか？
できるだけ壊さずに直したいとお願いしました。

— 古民家を店舗に再生する際、気をつけたことは？
カウンターや家具のコーディネートを併せてお願いしたこと。空間全体の統一感が図れたと思います。

— 苦労した点はありましたか？
新築ではないので、限られたスペースに必要な厨房機器をすべて組み入れなければならなかったこと。

— 古民家再生で大事なことはなんですか？
必要な部分にお金をかけること。再生中は問題が多く出てくるので、そのつど設計者と十分話をすること。

— これから再生をする人へアドバイスをお願いします。
雨漏り、排水など水の問題を解消し、風の流れをつかって木の家が朽ちないように配慮してあげてください。



和

牛のうまみをじっくり閉じ込めた極上のステーキが味わえる人気店「灰屋」。シェフの奥様の実家であった築350年の古民家を現代風に改修し店舗として再生。もとの敷地上に県道を通す計画が進められたため、建物を一度持ち上げ、180度回転させてから後ろに下げるといふ、大掛かりな工事となった。もとは茅葺きであったという寄棟型の屋根も防火対策などの問題から瓦状の銅葺きに変更。板戸や欄間などの建具のほとんどは旧家のものをいかしている。『灰屋』とはもとの家の屋号で、この家に対する愛着と炭火を生業にする店舗のイメージに合うことから店名として使われている。

ここで味わえるのはフレンチの有名店で腕を磨いたシェフが手掛ける独自のコース料理。メインとなる牛肉は産地をあえて限定せずに、シェフが実際に見て納得したもののみを仕入れている。肉の焼き方にもこだわり、一度鉄板で焼いてから備長炭で旨味を封じ込めるようじっくりと焼く。この方法はシェフ自らが考案したオリジナル。余分な油も落ちるので、ステーキなのにあっさりいただけると女性客にも好評だ。

肉以外の食材も県内産の有機野菜や米を使用するなど、地産地消にもこだわっている。ハンバーグやスペアリブ、カレーなど、気軽に楽しめるランチメニューも人気。週末は混雑が予想されるので、予約してからのほうがオススメだ。

はいや 灰屋

炭火焼ステーキ



癒しの食事処

